

毎日の保育問題 (八)

泣き方いろいろ／＼取扱いろいろ／＼

上澤謙 二

◇泣き月涙の月

四月五月さいへば、櫻花爛漫、新緑映發。長閑ささ新鮮さの好季節ですが、幼稚園では泣き月、涙の月。保育者に取つては、最も氣をもみ、手数がかゝる書き入れ時であります。

知らないところへ初めてやつてくる新入園児。會ふは見知らぬ顔ばかり、ひびくは聞き馴れぬ聲ばかりで、卒然として鬼界ヶ島へでも取残されたやうな思ひがするでせう。

しかも彼等は幼児であります。泣くよりほかにすべがない。『お家へかへる、お母さま！』と叫ぶよりほかに道がない。それがあつちにも、こつちにも、同時に、一齊に揚がるのです。

それを『泣く子に地頭に勝たれぬ』と、古い諺を引出して澄ましてゐるわけにゆきません。さうかして取りしづめなければなりません。しかも保育者としては、叱咤ではない。威嚇ではない。單なる御機嫌取りではない。より教育的に取扱はねばなりません。

げに保姆に取つて、櫻花の月、新緑の月は、氣つかひの月、手数の月と申すべきでせう。

◇これよおんが

なだめても、すかしても、泣きやまない。泣きやむころか益々募ります。『手がつけられない』とはこのこと。實際手をつけて引寄せようとしてもすれば、身ぶるひして、泣聲は火のつくやうに高まるでせう。

困り果てた先生の頭に、この時、浮かぶ一つの方法は『おんぶ』といふことだ。

おんぶする——これは御承知のやうに西洋にはありません。東洋の或るところでは、子供を背中で處理するのが見られますが、長い紐で上下をしつかりくくりつけて、おぶふ者がおぶはれる者も、全く重ね餅のやうな緊密一如の状態を呈するのは、恐らく日本獨特かと思はれます。

幼稚園では勿論紐でくくりつけるではありません。

『手おんぶ』です。

『○○ちゃん、おっつして。いゝ子ね、おっつして』なきこ、なだめるでせう。

それでもなか／＼泣きやまない時は『さあ、お歌をうたつてあげますからね』とまでいふでせう。さうして忘れかゝつたと思はれるやうなあの子守歌——保姆養成所ではこれは正式に習ひませんでした——を、今更一生懸命に、ほんたうに一生懸命にうたひ出すことさへあると思はれます。

さうするに、おゝ、だん／＼泣聲はやはらぎます。だん／＼だん／＼泣きになります。

『これは有難い』

その際、先生は心からさう思ふでせう。さうして猶も一生懸命にうたひつゞけるでせう。

五月の陽光は燦として先生の額を照らし、髪のははひに

にじみ出した汗の小さな粒に、光を與へます。背中はじつさりぬくもつてきます。うしろで組んで、子供を支えてゐる手は、やゝ痺れを感じはじめました。

けれども、さう／＼泣きやみません。

ホツ／＼長い溜息をついて、そつ／＼かへつてみるに、何のこゝろ！ いつの間にかスー／＼眠つてゐるではありませんか。

『まあ、眠らせるためにおぶつたのではなかつたのに……』

そんな場合もあると思はれます。

おぶつてうたへば、大概の場合、大概の子供は、眠らな

いまでも泣きやんでしまふやうです。

そこで先生はかう思ひます。

『これよ、これ、泣いたら仕方がないから、これからこれにしませう。経験がさう教へたのですもの』

全くその通り。『経験がさう教へたのです』。しかもこの経験たるや、相当大變な経験であつたのです。

◇赤ちゃんに還る

ところで、その経験の内容を考へてみませう。

子供がさうおとなしくなるのは、否、おとなしくなるのを通り越して、うつら／＼と夢のお國にまで到達するのは、抑々さういふわけでせうか。

『幼なごころに還る』は、大人の世界でよくいはれる言葉ですが、彼等は幼児で、現在幼なごころによつて生活してゐるのですから、そんなごころがありやう筈はありません。しかし赤ちやん時代は彼等に取つても過去のものなので、それに還るごころはありません。時に幼児が、お母さんに對して非常にあまつたれたり、抱つこしてもらひたくなつたり、お乳をひつばつてみたりするのは、この表はれごころはありますが、先生の背中にかじりつきながら、子守歌を聞きながら、よい氣持になるのも『赤ちやん心に還る』ためだご思はれます。

事實、おぶふごころ、うたふごころ、又うたはれる歌そのものも、赤ちやん時代の再現ではありませんか。これで『赤ちやんごころ』が起らなかつたらさうかしてゐます。うらなつかしい赤ちやん時代に還つて、遂よい氣持になつて、いつかうつら／＼なるのは當然のごころです。

ここに問題があります。

一體子供は前を觀て、うしろを見ないごころに、特徴もあり、意義もあります。過去に生活するのは老耆人のごころ。子供は將來に活きるもの、活くべきものです。それをわざわざ過去に還すごころは、けつして望ましいごころではありません。

それが泣くのをやめさせるやうな場合に應用されるのは、赤ちやん時代の安易な氣持に退歩させるごころで、あまやかす以外に何もない結果になるでせう。

幼児があまつたれてゐるごころ、まあ、赤ちやんみたい。をかしいねごころ、よくいはれるのに徴しても、この間の消息は察せられませう。

さういふ安易な氣持になるからこそ、幼稚園の先生の背中にゐるごころを、いつかお母さんのそれご取りちがへて、スー／＼と軽いいびきを立てるやうなごころになるのです。それだけではありません。

この方法は、形式からいつても、さうも適當ご思はれません。

關係を絶つごころを形容して『背をむける』ごいひますが、おぶつた状態は正にこれではありませんか。

お互の細かい心の交渉は、さうしても顔を突合はさなければ生まれてきません。申すまでもなく、顔の表情が最もよく心を表はすからであります。

先生はあらぬ方を見つめて、子供は先生の後頭部に見入つて、それで相互の細かい心の交渉ができる筈はないでせう。先生がまごころこめていふ言葉の一つさへも、背中をむけてゐてははつきりはいらないうでせう。「泣くのをやめさせるごころいふやうな大轉換——その子供に取つては——を

持ちきたすこんな場合に語られる言葉こそは、單に口から出て、耳に入るものではないでせう。目からも、筋肉の動きからも、否、九萬九千の毛孔からも語られねばならぬでせう。かくてこそ、心から心へ通ずるのだと思ひます。

こゝで癡入つたのは、細かい心の交渉からでなく、あまつたるい安易さからであります。そのスキートな味を味はつた子供は、多分その次に泣き出した時は、おぶはれるまでは泣きやめずまい。それが嵩ずるに、おぶはれるのを待つて泣いてゐるさいふやうな心理状態にまでなるでせう。それでこの子供は、この限りに於ては、幼稚園へ來たこゝによつて赤ちやんになつたさいふやうな、奇妙な現象を導き出さないとも限らないでせう。

さう考へても、この際おぶふさいふこゝは、理想的な方法とはいはれません。

◇アーン／＼禁制

泣きやめさせる第一段階は、聲を出して泣くこゝ——あのアーン／＼をさめることです。これに工夫を全力を傾けなければなりません。

有名な心理學者がいつた『悲しいから泣くのではない、泣くから悲しくなるのだ』さいふ言葉は、幼兒のこの場合にはつく／＼眞理だと思はせられます。

アーン／＼さいいつてゐる間は、何をいつてもよく耳にはいりませんし、何をしてその通りに感じません。自分のその聲に心を取られて、他を顧みる餘裕が出てこないのです。

屢々アーン／＼を大聲を張り上げてゐる子供をかへて、しきりに何かいつてゐるところを見ますが、恐らくそれは効果がないうでせう。かへられるのをただ窮屈さ感じ、いはれるのをただうるさいさ感じるだけでせう。アーン／＼はやがてワーツ／＼さいふ絶叫に發展するこゝは必定さいいつてよいでせう。

かうはしないで、もう少し自然な方法を採る向もあります。

『これを歌つてゐるうちに、だん／＼泣きやむだらう。かうやつて抱へてゐるうちに、自然に泣きやむだらう』かういふ態度がそれです。

しかしこれは消極的に過ぎます。泣くこゝが長引けば長引くだけ恢復も長引くのです。長く泣いた子供は、泣きやんでからさへ、いつまでもしやくり上げてゐるでせう。かうなるさなか／＼解決がつきにくいのです。

だから、出来るだけ聲を出す間を短かくするやうに仕向けるこゝ、働きかけるこゝが必要です。

それにはさうしたらよいでせう。

◇透かさず抱く

やはり抱くのがよいと思ひます。

これは先生の顔ミ子供の顔を、まごもに向き合はせま
す。さうしてぎんなに近くへでも持つてこられます。時に
よつては頬ミ頬ミをすりつけるこごさへもできます。時に
よつてはその反對に、すつミ離れて、しげく見入るこご
もできます。さうして全貌をうかがひ知るこごもできま
す。キツミ腕みつけるこごもできます。又必要があればよ
そをむいて、しばらく無關係であるこごもできます。兎に
角順應自在にいふべき便利な状態なのであります。

顔だけではありません。手の方もさうです。左右から伸
びて合はさつてゐるので、ふんはりさやさしく容れ
ておくこごもできます。じつミ胸に押しつけてかへるこ
ごもできます。或はギョツミ力を入れて、いつかな動かさ
ず、しつかりおさへつつけるこごもできます。又必要であ
れば手を解いて、高く支へて、膝の上に立たせるこごもで
きます。兎に角變通自在にいふべき便利な状態なのであ
ります。

この顔ミ手ミを同時に聯絡して用ゐるこごができるの
で、その効果は二倍になります。さうして順應ミ變通ミを
併せての自由な親密な接觸を保つこごができるわけであり

ます。

だから泣く子は、先づ抱き上げるこごがよいやうです。
さいつて、一聲でも張り上げたなら、さつそく抱くこごの
ではありません。成るべく抱かないで済ます方がよいので
すが、さうも形勢不穩で、事、重大になるやうでしたら、
透かさずかうするこごです。

抱かうこごするミ「いや」ミ頭をふる子供があります。
それ以上に抱いても兩足をバタ／＼させる子供、ワツ／＼
さびさび泣き出す子供もありますが、先生はそれに驚き、
負けてはなりません。さういふ時は、前述の「ギョツミ力」を
入れて、いつかな動かさず「こごいふ手の働き」じつミ近く
へ寄せる「こごいふ顔の働き」を併用する場合です。さうし
てみんな離れたしつかなこごころへ連れてくるこごです。
これが門こごいふか、いさぐちこごいふか、前提こごいふか、
兎に角これを基礎として、この上に立つて、いよく相互
の個人的交渉がはじまるわけであります。(つづく)